

1章 用具と調墨

はじめに

作品例1

「寒」

「神気凛々森の鎮守」

6

「鞋道」

「上高地」

7

「深谷秋景」

「流れ」

8

「寒い朝」

「霧海」

9

墨の美を極める……「先濃後淡」による表現方法

用具の準備 美しい墨色の一步

墨の磨り方

三墨法を作る

側筆・半側筆・直筆

参考作例「雨後の参道」

〔描法1〕 シクラメン 「先濃後淡」の基本……遠近感の表現

絵画の魅力とは

2章 描法の実際

〔描法2〕 杉木立 「先濃後淡」での描き方……複数のテクニク

刷毛の準備／幹から枝を描く／手前の葉を描く／奥の葉を描く／背景を描く
草むらを描く／背景をまとめる／刷毛による淡墨仕上げ

作画の手順

樹木の基本描法

参考作例1 「尾瀬の木道」

参考作例2 「嵐風そよぐ棚田」

〔描法3〕 噴煙 「筋目を生かす」描き方

〔描法4〕 溪谷 「刷毛」を使った描き方

作画の手順

〔描法5〕 霧海 「刷毛と筆」を使った描き方

3

10

11

12

13

14

15

16

17

18

20

21

24

26

27

28

36

38

40

41

42

44

46

48

墨の美に学ぶ水墨画

目次……

3章 描法の展開

参考作例「黄山」

〔描法6〕 山岳 「にじみとかすれ」の表現

〔描法7〕 雪山 「刷毛」を使った描き方

参考作例「吹雪」

〔描法8〕 ブナ林 「ドーサとスタンピング」を使った描き方

作画の手順

〔描法9〕 濤声 「ドーサ」を使って「吹く」

〔描法10〕 怒濤 「ドーサ」を使って「たたく」

ドーサ(髹水)について

膠について

〔描法11〕 幽玄 「膠」の活用法

作画の手順

〔描法12〕 收穫 「ドーサ」を使った描き方

作画の手順

参考作例「清流」

〔描法13〕 月と星 「ドーサと膠」を使って描く

作画の手順

参考作例1 「十五夜シアター」

参考作例2 「天の川をいたたく森」

作品例II

〔炎〕

〔WALL・鳩〕

〔WALL・アンコールワット〕

〔バラシンフォニー〕

〔WALL・バラ〕

構図について

参考作例1 「山荘」

参考作例2 「沼畔」

51

52

54

56

57

58

65

66

68

70

71

72

74

76

79

81

82

84

85

86

90

91

89

92

93

95

1章 用具と調墨

水筆画は筆・墨・硯・紙など、用具の特性を生かして、その他の絵画とは異なる描法の魅力、表現の可能性が生まれます。本章では、まず基本となる用具の準備から扱い方、すべての描法の基本となる「三筆法」の調墨のポイント、側筆・半側筆・直筆という用筆の方法、そして「先濃後淡」という基本原理を解説していきます。

用具の準備

美しい墨色の二歩

用具の種類

水墨画の基本的な用具は、筆・硯・硯・紙の「文房四宝」と呼ばれるものですが、どのようなものを選ぶかは画家それぞれの工夫があります。ここでは、その種類と特徴をみていきましょう。

筆

筆の種類は大変に多く、形の上からは大から中・小、長鋒（穂先の長い筆）、短鋒（穂先の短い筆）に分類でき、毛の性質から大きく軟筆、硬筆に分けられます。そして、軟筆の代表が羊毛であり、水の含みが良く広い面を描いたり「ぼかし」にも効果的です。それに対して硬筆の代表にはイタチの毛があり、主に線描に適しています。本書でも羊毛とイタチを使い分けています。また刷毛もテーマによって用いています。

墨

ご存知のように墨には油煙墨と松煙墨があります。油煙墨は墨の色に茶色味があり、山水面の描法に多く用いられ、一方の松煙墨は青味がかって比較的淡い表現に適し

ています。また、墨液にも使いやすく質の良いものがありますので、これも試みるとよいでしょう。なお、多くの画家は「古墨」を珍重しておりますが、信頼のおけるものが少なく購入する時には注意を要します。

硯

中国製、日本製と各種ありますが、良い硯は素地が緻密で墨のおりやすいことがポイントです。極端に高価なものを選ぶ必要はありませんが、頻繁に取り替えるものではありませんので、右記の要件を備えた品質の高い物を選びましょう。

紙

紙も水墨画の特徴ある材料です。宣紙、麻紙が一般的ですが、特別に選んだ紙を用いて新しい表現に挑戦してみるとも大切です。特に私が愛用している紙は「神郷紙」です。楮（こうぞ）100パーセントの越前和紙で、表面の目がつまっています。厚みがあり、麻紙よりも墨色がきれいに出て墨の特徴を引き立てる紙です。

用具の配置

実際の教室でも使っている用具の配置です。刷毛や筆はこの程度の数でも充分ですが、絵皿は描く作品によって調節しましょう。また筆洗はこまめに洗って、きれいな水を常時用意しておきます。



墨の磨り方



硯は上の方を高くして磨ることがポイントです。



まず、硯に水滴から水をとります。一度に多くの水を垂らすのではなく、数滴ずつ垂らしながら磨ります。



墨は硯に対して垂直に、円く回しながら磨ります。そして、磨った墨が又ルヌルしてきたら（これが濃墨です）、硯の海の方へ押して溜めます。



これを繰り返して必要な濃墨を用意します。

三墨法を作る

三墨法は、本書で解説するすべての描法の基本となるものです。十分に練習して、つねに自由に筆が動くようにしておきましょう。まず三墨法の調墨に入る前に、濃墨と淡墨を用意します。

三墨法の作り方①



筆先は整えておきます。



筆に視から濃墨をとります。



これを絵皿の土手につけておきます。この時、磨った墨の濃度を確認します。



次にもう一枚の絵皿を用意して、この濃墨に水を加えて調節し淡墨をつくります。



この時、十分に墨を混ぜてその濃さを調節します。淡墨の淡さの程度は絵皿の縁の色合いで確認できます。



濃墨と淡墨の準備ができました。この配置が常に頭の中に入っているようにすることで、自然に手が動くようになります。

ここでは、筆を三墨法の状態、つまり筆の根元から水・淡墨・中墨・濃墨の状態にするプロセスを解説しましょう。ただし実際に描く時は、描く対象により筆の角度や動かし方に変化が出ますので、三墨法といっても様々なバリエーションが必要となってきました。ここではあくまでも基本となる手順を紹介しました。

三墨法の作り方②



まず、筆は筆洗のきれいな水でよく洗います。



ここに淡墨を筆の半分ほどに含ませます。



次に筆の根元の余分な水分を布などでとっておきます。



筆先に硬から濃墨をとります。



濃墨の入った絵皿で筆を左右に振りながら、上下にスライドさせて墨を馴染ませます。



筆の根元から、水・淡墨・中墨・濃墨の状態になりました。

側筆・半側筆・直筆

次に三墨法を生かした描法の基本として、側筆・半側筆・直筆を考えてみます。

側筆



まず一般的な側筆は、写真のように三墨法の筆を寝かせて進行方向に直角に運筆する方法です。筆先が濃く、筆の根元が淡く表現できます。

半側筆



側筆よりもやや筆を進行方向に対して斜めに寝かせて描くと、側筆よりも幅の狭い濃墨から淡墨のグラデーションが描けます。

